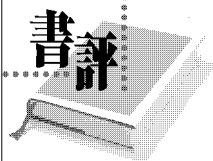


書評



野村総一郎，樋口輝彦 編

標準精神医学 (第3版)

神庭重信

時代に即応し、しかも精神医学のロマンを伝える上質な教科書

編者と執筆者とが一体となって教科書作りを楽しんだ、そんな印象を与えるのが本書である。章による出来不出来や体裁の不統一が少ないうえに、分担執筆の強みが生きている。つまり、その領域を知り尽くしている専門家の手による、正確でしかも漏れのないテキストが端正な姿を見せ、しかも“厳選された”という執筆者の個性的主張がそこかしこに滲み出ているところがとてもよい。

本書には編者の工夫の跡が随所に見てとれる。たとえば各章は、頭に“学習目標”と“キーワード”が配置されている。これはちょうど地図を手渡されて、登ろうとしている山々の特徴を頭にいれておくようなもの、とでも言えようか。そして、それぞれの章は箇条書きからなる“重要事項のまとめ”をもって終わる。全体を理解しながら、細部を記憶しなければならない学生には嬉しい配慮である。

某大学で内科学の教授をしている同級生がいる。彼は学生時代にハリソンの内科学を原文で読んでいた。そして周囲の尊敬を集めていた。近年もっぱら取りざたされるのは、国試合格率

の数パーセントの優劣であり、国試のガイドラインは年々そのボリュームを増している。ハリソンにのめり込んでいては国試に落ちるかもしれない。対策マニュアルが氾濫するのも仕方のないご時世ではある。それでも本物の医学を学ぼうとする志の高い学生は少なくないはずだ。彼らには、本書が伝えようとしている精神医学のロマンや奥深さに触れてほしいと願う。

昨今、精神医学への要請が社会のさまざまな場面で高まっている。医療が最先端になればなるほど、患者や家族の心のケアが重要となってくる。これらの現場には、人がこれまで経験したことのない不安、葛藤、懊悩が満ちているからである。一方プライマリケアでは、今年始まったニューヨーク市医師会の取り組みにみるように、うつ病の早期発見とそれによる自殺予防が喫緊の課題となっている。家庭・学校・職場におけるメンタルヘルスの重要性は今さらいうに及ばない。本書は、卒前教育の枠を超えて、こうした時代の要請にも十分応えられる上質な教科書に仕上がっている。

(九州大学大学院教授・精神病態医学)

●B5 512頁 2005 定価6,825円(本体6,500円+税5%) 医学書院